

聖書:テサロニケ人への手紙第一5章12~28節

説教:御霊を消してはいけません

はじめに

私たちは生活していく中でさまざま苦勞を味わうわけですが、そのなかでもとりわけ大変だと思ふことの一つに人間関係の問題があります。学校や職場やサークルの人間関係はもちろんです、自分の親や兄弟、親戚との関係で悩む方もいます。では教会はどうなのかといえば、教会も例外ではありません。同じクリスチャン同士だからわかっただけで違いないと思っていたら、意外にそうではなかった。そんな経験をされた方がいるかもしれません。

今朝も続いてパウロがテサロニケ教会に宛てた手紙を開いています。テサロニケ教会は、主の再臨を待ち望む信仰という点では素晴らしいのですが、激しい迫害にさらされるうちに、再臨はもう間もなくであると叫ぶ人たちが現れ、再臨の主をお迎えするために働くことを止める極端な人たちが現れました。これに対しパウロは、主の再臨を待ち望みつつも、日々私たちは落ち着いてやるべきことを忠実にやり、地に足をつけて身を慎みながら歩みなさいと勧めました。これが前回までのあらすじです。その手紙の最後のところでパウロは、「兄弟たち、あなたがたにお願いします」と言い、それに続いて具体的なことを書いています。これが私たちにどのような意味があるのか、ともに考えていきます。

## 1 パウロの願いと命令

### 1) 二つのグループに向けて

ここを読んで、12節と14節で「兄弟たち」と同じことばを繰り返していることに皆さんは気がつくと思います。でもその後続くことばが微妙に異なっています。日本語訳ではわかりにくいのですが、12節では「あなたがたにこれこれのことをするように切にお願いします。」そんな低姿勢の言い方。ところが14節では「あなたがたに勧めます」と言ってから、「これこれしなさい」と少し強い言い方です。明らかにことばの調子が違う。わかりやすく言えば、12節は指導される側の人たちに向けて語り、14節は指導する側の人たちに向けて語っている。そのように見ることができます。

### 2) 指導される側の人たちへ

それまず最初は指導される側の人たちです。12節の真ん中から13節までを読みます。「あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人たちを重んじ、その働きのゆえに、愛をもって、この上ない尊敬を払いなさい。また、お互いに平和を保ちなさい。」

ひとことで言えば、教会の指導者を尊敬しなさい、そんな風に聞こえます。信徒は牧師を尊敬しろと言いたいのか。でもここを直訳するとこうなります。「このように労している人たちを尊敬するようにお願いします。そしてお互いに平和を保ってください。」先ほども言いましたように。身を低くしながら、語っています。

### 3) 指導する側の人たちへ

では次に指導する側の人たちに向けたことばです。14節。「兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をし、すべての人に対して寛容でありなさい。」先程、弱い人たちへは「お願いします」という身を低くした語り方でしたが、ここでは「こうしなさい」という強い言い方をするのは、それだけ指導する者の責任が重いということです。

さて、このパウロのことばから、テサロニケ教会にどんな人たちがいたか推測できます。「怠惰な者」と呼ばれるような人たちがいたらしい。具体的に言えば、厳しい迫害を受けるなかで、偏った終末論に取り憑かれ、働くことをやめてしまった人たちを指すものと思われます。また「小心な者」とあります。「臆病な者」を連想しますが、むしろこれも厳しい迫害を受けて落胆している者であるとか、信仰から離れてしまいそうな人たちのことかもしれません。そのような人々をなんとか励まそうとした人たちがいた。その両者の間でトラブルが起きた。どうもそのような話です。トラブルの理由はいろいろですが、どこの教会でも起きうる問題でしょう。決して他人事ではありません。そんなときどうしたらよいのか。ここにはいくつかのことが書かれていますが、今日はこの中から19節に注目したいと思います。これは今言った二つのグループの両者に向けて語っていると考えるとよいと思います。

## 2 御霊 (ロマ書8章)

### 1) まだ見ていないものを忍耐して待ち望む

19節。「御霊を消してはいけません。」御霊のことをまるで蠟燭の火のような例えで語っています。御霊を消すとはどのようなことか。いやその前に御霊とは何か。パウロは、教会の中に極端な人たちが現れて混乱している人々にどうして御霊のことを言うのか。ここには詳しい説明がありません。そこで御霊、あるいは聖霊とも言いますが、この御霊についてパウロが最も詳しく説明しているローマ書8章を開いて御霊の働きについてまず確認します。

ローマ書8章24、25節。「私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。」

ここで「望み」と言われているのは、私たちのからだが贖われる時、すなわち主の再臨の日のことです。だれも見た者はいませんので、見えないけれども忍耐して待つ。これがクリスチャンの姿と言っていていいでしょう。ところが一つ問題がある。「忍耐」しなければならない。「忍耐」が得意という人はまずいないと思います。できればしたくないのが本音です。

### 2) 御霊の助け

そこでちゃんと力強い味方がいる。26節です。「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもってとりなしてくださいます。」私たちにはできなくなっていることを、御霊が代わりに神に向かってとりなしくて助けてくださる。こんな大切な働きをしてくださるのですから、「御霊を消してはいけません」と言う理由は納得できません。

### 3) 御霊のおられる場所

では次の問題です。その聖霊なる方はどこにおられるのか。父なる神は天におられ、子なるイエスは私たちのところへ人となって来られた。それはわかる。しかし聖霊はどこにいるのか。居場所が分からないと、消すとか消さないのかもわからない。

でもこれは実に簡単で、この方は私たちのうちに住んでおられる。ところが実感がほとんどない。それは当然です。なぜなら、私たちの心とか精神とかたましいとか、いろいろな言い方がありま

すが、そういうところにほとんどぴったりと重なりあっているので、自分の霊的な部分なのか、神が私たちに与えてくださった聖霊なのか、区別が難しい。だからわかりにくいわけです。でもとにかく私たちのうちに住んでくださっている。

### 4) 御霊を消す

これで聖霊の働きと居場所がわかった。そうしますと聖霊を消すとはどのようなことか。実例として具体的にテサロニケ教会の問題を見るとわかります。迫害が激しくなっていくとき、苦しみの多い目の前の生活はもうどうでもよい、自分たちはただ主の再臨だけを待てばよいのだと叫ぶ者たちが現れました。「怠惰な者たち」と呼ばれる人たちです。

それ見て心を痛めた人たちは、それは違う。どんなにつらくても毎日を丁寧に歩むべきですと訓戒し、指導しました。ところが「怠惰な者たち」は、まったく言うことを聞かない。そこで指導する人たちはこう思ったでしょう。「あのような人たちは教会に来なくてもよい。」だからパウロは言ったのです。「すべての人に寛容でありなさい。」「だれも、悪にたいした悪を返さないように気をつけなさい。」指導する人たちは、悪に対して悪を返すことによっていつの間にか御霊の火を消そうとしていた。

いっぽう、「怠惰な者たち」と言われる人たちも、指導者の訓戒を聞いても言うことを聞こうとしない。かえって、指導者を馬鹿にし、彼らはだめなクリスチャンなのだとか軽蔑した。だからパウロが言ったのです。「愛をもって、この上ない尊敬を払いなさい。」こうやって、彼らは最初は信仰の熱心から始まったことだったはずなのに、互いに尊敬することを忘れてしまいました。

この二つのグループの人たちのいずれも、最初は純粋な信仰から始まったはずですが、けれども人間関係がこじれてくるうちに、いつの間にか御霊の火を消すことになってしまいました。

## 3 主イエスの来臨ときまで

### 1) 御霊の語りかけ

御霊はその時何をしていたのでしょうか。としなしをしておられていたはずですが。人の心に語りかけていたはずですが。そしてだれもが御霊の語りかけを聞いていたはずですが。「あなの罪に向き合いなさい。」でも聞きたくありません。どこまでも向き合おうとしない。挙げ句の果てに、もっとうらしい理由をつけて相手を攻撃する。そんなことを繰

り返しているうちに、御霊の火は少しずつ小さくなり、やがて光が消えてしまいます。これが彼らのしたことでした。

## 2) 完全に聖なるものとしてくださる

私たちはどうするでしょうか。私たちも人間関係のトラブルに出会ったとき、相手を憎み、そのことから自分の中にある罪のうずきを感じる場合があります。最初は小さなものですから気に留めようとしない。でもみことばをとおして、徐々に罪のことを正面から見るようにと迫られます。御霊の働きを知る人は、どんなに苦しい作業であっても、御霊の助けをいただくことに信頼して、罪に向き合おうとするでしょう。そのようにしてやがて罪からのきよめを神からいただきます。これがクリスチャンとして私たちが生涯かけておこなう歩みだと知っています。人間関係をうまく築くための近道があればと思いますが、これしかありません。

でもいったいなぜこんなことをするのでしょうか。何か意味があるのでしょうか。

23節にこうあります。「平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨の時に、責められるところないものとして保たれていきますように。」

このみことばを読んで、私たちは主の来臨の日に一気に聖められると思っていたかもしれませんが、でも、それは少し違う。いま見たように、日々の歩みの中ですでに聖めていただく作業が始まっているのです。

そうするとこんな言い方ができます。もしだれかに、主の再臨は本当にあるのですか、その証拠を見せてくださいと尋ねられたらこう答えることができる。

「私たちのうちおられる聖霊に助けていただきながら罪と向き合い、聖められている姿が見えるでしょうか。もちろん不完全な聖めかも知れませんが、でももし見えるならそれが主の来臨が確かであることの証拠です。というのは、この世界を見てもわかるように神のなさることには無駄がひとつもありません。であれば聖めるという作業が途中で終わるはずがない。ならば、完全に聖めていただくときが絶対に来るはずではないですか。それが主の再臨の日です。」

私たちのこのような歩みが世の証しともなることを知っていただきたいと思います。

24節の約束のみことばを読んで終わります。「あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。」